特集「広報にいかっぷ創刊600号」
～昔の広報誌からみる新冠町の移り変わり～

広報にいかっぷは、平成28年5月号で創刊600号迎えました。今月号は、先月号に引き続き、郷土資料館に保存している昔の広報誌の中から節目となるものを選び、当時の時代や町の様子などを紹介します。

にいかっぷ

主な内容
・三度、町政を根幹するに当って
・太陽小部落あげて30周年を祝う
・第2回定例会から
・新冠ダム周辺をレクリューションの森として指定をうける

楽しい子どもの遊びスクールから

200号

昭和52年6月
新冠町役場

「にいかっぷ200号　昭和52年6月発行」

表紙には、旧節婦小学校のグランドで行われた**「楽しい子どもの遊びスクール」**というタイトルの写真が掲載されており、たくさんの子どもたちが仲よく遊んでいる様子が写し出されています。

『集まった子ども達は、陣とり、石けり、かたつむりなど次から次と、昔の楽しい遊びを紹介され、時間のたつのも忘れ、昔の遊びを思う存分楽しんでいました。』

もちろん、現代においては、「陣とり」や「石けり」「かたつむり」といった遊びは過去の遊びになっていますが、約40年前でもすでに昔の遊びとして紹介されていることに驚かされます。

表紙を一枚めくると、小野木町長が無投票当選で3選を果たした後の最初の定例会の様子が掲載されています。

小野木町長は、この定例会の中で、次のように所信表明を述べています。

『今後、四年間の行政の柱は、
一、健康で豊かな福祉社会をつくること。
二、住みよい環境をつくること。
三、教育文化の振興を図ること。
四、産業の振興を図ること。
の四つに置き、特に、農村基盤整備を軸に、農業と漁業の二百海里時代に対応した振興を図ることを、最重点に取り進めて参る所存であります。』

この様に、この時代は、特に「産業振興」に力を入れていた様子が伺えます。

小野木町長は、昭和44年6月に有田町長の急逝に伴い行われた町長選で、42歳の若さで初当選し、その後、平成元年までの5期20年の長きに渡り、町政のかじ取りを担うこととなりますが、ここに掲げた「4つの行政の柱」は、4期以降も引き継がれていく、小野木町政の重点施策となりました。

この広報誌を読み進めると、当時の文化団体の活動状況が紹介されており、その中に次のような一文が書かれています。

『私達の毎日は、仕事や時間におわれ、一日があっという間に終わってしまい、その日を振り返ってみると、今日は、なにをしたのかと考えさせられる経験を、それぞれおもちのことと思います。（中略）
趣味を生かすこと、スポーツを楽しむこと、静かに読書にふけること、大勢の仲間と語り合うこと、いずれも、多忙な合い間に生かしてこそ、明日への活力を養い、それを継続することの努力が、仕事への意欲にも、つながるといわれております。
同一趣味を持つ方々は、心と心の結びあいを深めやすい立場にあります。しかも、それが大きな輪となるほど、文化の高い町を築き上げる重要な役割を持っております。』

当時は、生活するのに必死だった時代から、生活の質を向上させようという変化が起き始めた時代で、町内でも多くの同好会が活動を始めた時期でありました。

ここで述べられている「時間に追われる毎日の中で活動することが大事である。」という内容は、現代の私たちにも共通しており、学ぶことが多くあるように感じます。

文化団体名
新冠短歌会
新冠カメラ同好会
新冠詩吟同好会
新冠絵を描く会
新冠手芸同好会
新冠華道グループ
新冠茶道グループ
新冠囲碁同好会
新冠人形劇サークル"ゆびきり"
新冠合唱団
新冠町かるた同好会
節婦華道サークル
若園華道サークル
若園囲碁グループ
新冠フォークダンス同好会
新冠判官太鼓
ブルーホース

広報誌に掲載された、当時の文化団体の一覧

「広報にいかっぷ第350号　平成5年3月号」

『ボクたちのあったかーい給食。』という巻頭特集で始まるこの広報誌では、現在の町内の学校給食に引き継がれている「自校調理方式（各学校で給食を調理し提供する方式）」についてスポットがあてられています。冒頭の書き出しには、自校調理方式導入の流れが詳しく掲載されていますので紹介します。

『★新冠町の給食の歴史
☆それは明和小学校からはじまった

平成四年度の全国学校給食優良校に明和小学校が選ばれ、文部大臣賞という大きな名誉に輝きました。全国の完全給食実施校三〇、九一九校の中にあって、受賞したのは七三校という、とても狭き門をくぐりぬけました。

そんな明和小学校が、新冠町で最初に完全給食を導入した学校でもあります。その歴史は古く、日高管内でも早い方で、今から三十年前の昭和三十七年にさかのぼります。それに続いたのが若園、太陽、東川、美宇の各小学校で、昭和五十四年度までに明和小学校と同じ自校調理方式による完全給食に移行しました。

現在では「新冠方式」とまで呼ばれるようになった自校調理方式は、こうしてその基盤が築かれることになりました。しかし、残り五校の整備の段階でセンター方式の導入検討などを理由に、整備は一時見合わされることになり、最終的に自校調理方式での実施を決定したものの、再整備に着手したのは平成二年になりました。以後、急ピッチで進められた給食設備工事は、同年の朝日小につづいて、翌平成三年度には大狩部、節婦、新冠の三小学校と新冠中の四校が相次いで完成。ここに新冠の学校給食体制が完結し、昨年の三学期から足並みがそろった町内全校の学校給食は、今年一月で満一年を迎えました。』

自校調理方式による学校給食は、この3月でみなさまをそろえてから満一年が過ぎました。
この頃に給食は地域にしっかりと根をおろし、同意支援はもちろん、おかあさんたちや先生、いろいろな人たちの評判が聞こえてきます。
お盆のチャイムを合図に教室へ運ばれる赤っぱかーい給食。
子供たちは和気あいあいのなか、手際よく盛り付けし、みんな楽しそうにいただきます。
でも、そんな給食を一つ一つどんなもの――？大多数の給食を食べたことがない人にとっては共通の関心事ではないでしょうか。
そこで今回は、町の広報が給食現場をのぞき、子どもたちの先生、栄養士さんなど、いろいろな人たちの声を拾ってみました。

現在、新冠町では、認定こども園と小中学校の全校で、この自校調理方式を取り入れております。また、日高管内の状況としては、センター方式を採用している町があるほか、学校での給食の提供をしていない町もあるなど、各町によって対応は様々のようです。

ほかに、この広報誌の特集の中では、保護者や栄養士、先生や調理員のコメント、1週間の給食の献立、各小学校の子ども達の給食についてのコメントなども掲載されています。

さらに、広報誌を読み進めると、平成4年10月に行われた**『第三回町民海外派遣研修報告』**が掲載されています。

「町民海外派遣事業」は、広く海外に目を向け、特色ある地域づくりや心豊かな人づくりを進めるため、また、新冠町の未来を拓く人材育成と後継者の育成を目指し、平成2年から10年までの間、計9回実施されました。訪問した国は、ヨーロッパ諸国、オーストラリア、アメリカなど多地域に渡り、9年間で延べ118名が参加しました。

平成4年度の研修事業は、10月26日から11月6日までの12日間の日程で、イギリス、ドイツ、フランスの西欧3ヶ国の視察を行いました。

広報誌に掲載されている記事は、帰国後に参加者全員で行った意見交換会の様子で、イギリスで訪問した競馬場や競馬と住民の関わりについての話しから始まり、古い文化を保存継承する景観づくりについて、現地で肌で感じる経済の様子、ドイツで見学した地域に開かれた老人ホームの様子などについて、参加者の感想や当町のまちづくりへの提案などが掲載されています。

平成4年当時は、まだ当町にレ・コード館も温泉も建設されていませんでしたが、岡町長のもと、新たなまちづくりの取り組みが本格的に始動した時期でもあり、この中でも、参加者が考える「魅力あるまち」について、積極的に意見を交換しています。

この年代の広報誌は、毎月のようにまちづくりについてのコラムが掲載され、また、住民同士の意見交換の様子も多く掲載されているなど、町民みんなで「新冠町の未来」について議論をしていた様子が伺えます。

参加者集合写真（イギリス・ウインザー城前にて）